

狐

永井荷風

青空文庫

小庭こにわを走る落葉おちばの響ひびき、障子しやうしをゆする風の音。

私は冬の書齋しよさいの午過ひるぎ。幾年いくねんか昔に恋人とわかれた秋の野の夕暮を思おも出すような薄暗い光の窓に、ひとり淋しく火鉢にもたれてツルゲネーフの伝記を読んでいた。

ツルゲネーフはまだ物心もつかぬ子供の時分に、樹木のおそろしく生茂った父が屋敷の庭をさまよって、或ある夏の夕ゆう方かたに、雑草の多い古池のほとりで、蛇と蛙いたまの痛いたましく噛み合っている有様ありさまを見て、善悪の判断さえつかない幼おさなご心こころに、早くも神の慈悲心を疑った……と読んで行く中うちに、私は何時いつとなく理由いわれなく、私の生れた小石川こいしかわ金富町かなとみちの父が屋敷の、おそろしい古庭のさまを思い浮べた。もう三十年の昔、小日向こびなた水道町すいどうちやうに水道の水が、露草つゆくさの間あいだを野川の如くに流れていた時分の事である。

水戸の御家人や旗本の空屋敷あきやしきが其処そこ此処ここに売物うりものとなっていたのをば、維新の革命があつて程もなく、新しい時代に乗じた私の父は空屋敷三軒ほどの地所を一まとめに買い占め、古びた庭園や木立をそのままに広い邸宅やしきを新築した。私の生れた時には其その新しい家いえ

の床柱にも、つやぶきんの色の稍さびて来た頃で。されば昔のままなる庭の石には苔いよ
いよ深く、樹木の陰はいよいよ暗く、その最も暗い木立の片隅の奥深いところには、昔の
屋敷跡の名残だという古井戸が二ツもあつた。その中の一ツは出入りの安吉という植木
屋が毎年々々手入れの松の枯葉、杉の折枝、桜の落葉、あらゆる庭の塵埃を投げ込み、
私が生れぬ前から五六年もかかつて漸くに埋め得たと云う事だ。丁度四歳の初冬の或る夕
方、私は松や蘇鉄や芭蕉なぞに其の年の霜よけを為し終えた植木屋の安が、一面に白
く乾いた茸の黴び着いている井戸側を取破しているのを見た。これも恐ろしい数ある記
念の一つである。蟻、やすで、むかで、げじげじ、みみず、小蛇、地蟲、はさみ蟲、冬の
住家に眠つて居たさまざまな蟲けらは、朽ちた井戸側の間から、ぞろぞろ、ぬるぬる、う
ごめき出し、木枯の寒い風にのたうち廻つて、その場に生白い腹を見せながら斃死つ
てしまうのも多かつた。安は連れて来た職人と二人して、鉋で割つた井戸側へ、その日の
落葉枯枝を集めて火をつけ高箒でのたうち廻つて匍出す蛇、蟲けらを搔寄せて燃した。
パチリパチリ音がする。焔はなくて、湿つた白い烟ばかりが、何とも云えぬ悪臭を放ちな
がら、高い老樹の梢の間に立昇る。老樹の梢には物すごく鳴る木枯が、驚くばかり早く、
庭一帯に暗い夜を吹下した。見えない屋敷の方で、遠く消魂しく私を呼ぶ乳母の声。

私は急に泣出し、安に手を引かれて、やっと家へ帰った事がある。

安は埋めた古井戸の上をば奇麗に地ならしをしたが、五月雨、夕立、二百十日と、大雨の降る時々地面が一尺二尺も凹むので、其の後は縄を引いて人の近かぬよう。私は殊更父母から厳しく云付けられた事を覚えて居る。今一つ残つて居る古井戸はこれこそ私が忘れようとしても忘れられぬ最も恐ろしい当時の記念である。井戸は非常に深いそうで、流石の安も埋めようとは試みなかった。現在は如何なる人の邸宅になつて居るか知らぬけれど、あの井戸ばかりは依然として、古い古い柳の老木と共に、あの庭の片隅に残つて居るであらうと思う。

井戸の後は一帯に、崇りを恐れる神殿の周囲を見るよう、冬でも夏でも真黒に静に立つて居る杉の茂りが、一層其の辺を気味わるくして居た。杉の茂りの後は忍返しをつけて黒板堀で、外なる一方は人通のない金剛寺坂上の往来、一方はその中取払いになつて呉ればと、父が絶えず憎んで居る貧民窟である。もともと分れ分れの小屋敷を一つに買占めた事とて、今では同じ構内にはなつて居るが、古井戸のある一隅は、住宅の築かれた地所からは一段坂地で低くなり、家人からは全く忘れられた崖下の空地である。母はなぜ用もない、あんな地面を買つたのかと、よく父に話をして居られた事がある。

る。すると父は崖下へ貸長屋でも建てられて、汚い瓦屋根だの、日に干す洗濯物なぞ見せつけられては困る。買占めて空庭にして置けば閑静でよいと云つて居られた。父にはどうして、風に吠え、雨に泣き、夜を包む老樹の姿が恐くないのであろう。角張つた父の顔が、時としては恐しい松の瘤よりも猶空恐しく思われた事があつた。

或る夜、屋敷へ盗棒が入つて、母の小袖四五点を盗んで行つた。翌朝出入の鳶の者や、大工の棟梁、警察署からの出張員が来て、父が居間の縁側づたいに土足の跡を検査して行くと、丁度冬の最中、庭一面の霜柱を踏み碎いた足痕で、盗賊は古井戸の後の黒板塀から邸内に忍入つたものと判明した。古井戸の前には見るから汚らしい古手拭が落ちて居た。私は昔水戸家へ出入りしたとか云う頭の清五郎に手を引かれて、生れて始めて、この古庭の片隅、古井戸のほつりを歩いたのであつた。古井戸の傍に一株の柳がある。半ば朽ちた其幹は黒い洞穴にうがたれ、枯れた数条の枝の悲しげに垂れ下つた有様。それを見ただけでも、私は云われぬ気味悪さに打たれて、埋めたくも埋められぬと云う深い深い井戸の底を覗いて見ようなぞとは、思いも寄らぬ事であつた。

敢て私のみではない。盗難のあつた其れ以来、崖下の庭、古井戸の附近は、父を除いて一家中の異懼恐怖の中心点になつた。丁度、西南戦争の後程もなく、世の中は、謀反

人だの、刺客だの、強盗だのと、殺伐残忍の話ばかり、少しく門構の大きい地位ある人の屋敷や、土蔵の厳めしい商家の縁の下からは、夜陰に主人の寢息を伺つて、いつ脅迫暗殺の白刃が畳を貫いて閃き出るか計られぬと云うような暗澹極まる疑念が、何処となしに時代の空気の中に漂つて居た頃で、私の家では、父とも母とも、誰れの発議とも知らず、出入の鳶の者に夜廻りをさせるようにした。乳母の懷に抱かれて寝る大寒の夜な夜な、私は夜廻の拍子木の、如何に鋭く、如何に冴えて、寝静つた家中に遠く、響き渡るのを聞いたであらう。ああ、夜ほど恐いもの、厭なものは無い。三時の茶菓子に、安藤坂の紅谷の最中を食べてから、母上を相手に、飯事の遊びをするかせぬ中、障子に映る黄い夕陽の影の見る見る消えて、西風の音、樹木に響き、座敷の床間の黒い壁が、真先に暗くなつて行く。母さんお手水にと立つて障子を明けると、夕闇の庭つづき、崖の下はもう真暗である。私は屋敷中で一番早く夜になるのは、古井戸のある彼の崖下……否、夜は古井戸の其底から湧出るのではないかと云う感じが、久しい後まで私の心を去らなかつた。

私は小学校へ行くほどの年齢になつても、伝通院の縁日で、からくりの看板に見る皿屋敷のお菊殺し、乳母が読んで居る四谷怪談の絵草紙なぞに、古井戸ばかりか、

丁度其の傍そばにある朽ちかけた柳の老木おいぎが、深い自然の約束となつて、夢にまで私をおびえさせた事が幾度だか知れなかつた。恐いものは見たい。恐る恐る訊く私が知識の若芽わかめを乳母はいろいろな迷信の缺はきみで切摘きりつまんだ。父親は云う事を聴かないと、家を追出して古井戸の柳へ縛りつけるぞと怒鳴どなつて、爛らんまんたる兒童の天真てんしんを損う事をば顧かえりみなかつた。ああ、恐しい幼少の記念。十歳を越えて猶なお、夜中一人やちゆうで、厠かわやに行く事の出来なかつたのは、その時代に育てられた人の児この、敢て私ばかりと云うではあるまい。

父は内閣を「太政官」大臣を「卿」と称した頃の官吏の一人いちにんであつた。一時、頻しきりと馬術に熱心して居られたが、それも何時しか中止になつて、後四五年、ふと大弓だいきゆうを初められた。毎朝まいちよう役所へ出勤する前、崖の中腹ちゆうぶくに的を置いて古井戸の柳を脊にして、涼しい夏の朝風あさかぜに弓弦ゆみづるを鳴すを例としたが間もなく秋が来て、朝寒あささむの或日ある、片肌かたはだ脱ぬぎの父は弓を手にした儘まま、あわただしく崖の小道を馳上かけあがつて来て、皸枯しわがれた大声に、
「田崎たさき々々！ 庭に狐が居る。早く来い。」と、どなられた。

田崎と云うのは、父と同郷の誼よしみで、つい此の間から学がく僕ぼくに住込んだ十六七の少年である。然しかし、私には、如何にも強そうなその体格と、肩を怒らして大声に話す漢語交りの物云いとで、立派な大人のように思われた。

「先生、何の御用で御座います。」

「怪けしからん、庭に狐が居る、乃公わしが弓を引いた響ひびに、崖かみの熊笹くまざさの中から驚いて飛出した。あの辺へんに穴があるに違ちがいがない。」

田崎と抱車夫かかえしやぶの喜助きすけと父との三人。崖を下りて生茂なまきつた熊笹の間あいだを捜たしたが、早くも出勤の刻限ときげんになった。

「田崎、貴様、よく捜して置いて呉くれ。」

「はあ、承知おかしらしました。」

玄関に平伏した田崎は、父の車が砂利を轆きしつて表門を出るや否や、小倉袴こくらばかまの股立ももたち高く取つて、天秤棒てんびんぼうを手に庭へと出た。其の時分の書生のさまなぞ、今から考えると、幕府の当時と同様、可笑おかしい程ほど主従しゆじゆうの差別さべつのついて居た事が、一挙いっきよ一動いちどう思出しでされる。何事にも極ごくく砕けて、優しい母上は田崎の様子を見て、

「あぶないよ、お前。喰くいつかれでもするといけないから、お止よしなさい。」

「奥様、堂々たる男子が狐一匹。知れたものです。先生のお帰りまでに、きつと撲殺うちころしてお目にかけます。」

田崎は例の如く肩を怒いからして力味返つた。此の人は其後そのご陸軍士官となり日清戦争の時、

血氣の戦死を遂げた位であつたから、殺戮には天性の興味を持つて居たのであろう。日頃田崎と仲のよくない御飯焚のお悦は、田舎出の迷信家で、顔の色を変えてまで、お狐さまを殺すはお家の為めに不吉である事を説き、田崎は主命の尊さ、御飯焚風情の嘴を入れる処でないと一言の下に排斥して仕舞つた。お悦は真赤な頬をふくらし乳母も共々、私に向つて、狐つき、狐の祟り、狐の人を化す事、伝通院裏の沢蔵稲荷の靈験なぞ、こまごまと話して聞かせるので、私は其頃よく人の云うこつくり様の占いなぞ思合せで、半ばは田崎の勇に組して、一緒に狐退治に行きたいようにも思い、半ばは世にそう云う神秘もあるのか知らと疑いもしたのであつた。

午飯が出来たと人から呼ばれる頃まで、庭中の熊笹、竹藪の間を歩き廻つて居た田崎は、空しく向脛をば笹や茨で血だらけに搔割き、頭から顔中を蛛の巣だらけにしたばかりで、狐の穴らしいものさえ見付け得ずに歸つて来た。夕方、父親につづいて、淀井と云う爺さんがやつて来た。それは殆ど毎日のよう、父には晩酌囲碁のお相手、私には其頃出来た鉄道馬車の絵なぞをかき、母には又、海老蔵や田之助の話をして、夜も更渡るまでの長尻に下女を泣かした父が役所の下役、内證で金貸をもして居る属官である。父はこの淀井を伴い、田崎が先に提灯をつけて、蟲の音の雨かと疑われ

る夜更よふけの庭をば、二度まで巡回された。私は秋の夜よの、如何に冷かに、如何に清く、如何に蒼あおいものかを知つたのも、生れて此の夜よが初めてであつた。

母上は其の夜よの夜半よなか、夢ではなく、確かにこんこんと云う啼なき声を聞いたとの話。下女は日が暮れたと云つたら、どんな用事があつても、家うちの外へは一歩ひとあしも踏出さなくなつた。忠義ちゆうぎいちず一図の御飯焚お悦は、お家いえに不吉のある兆きざしと信じて夜明に井戸の水を浴びて、不動様を念じたために風邪を引いた。田崎が事の次第を聞付けて父に密告したので、お悦は可か哀あいそうに、馬鹿をするにも程があるとて、厳しいお小言こごとを頂戴ちやうだいした始末。私の乳母は母上と相談して、当らず触らず、出入りの魚屋「いろは」から犬を貰つて飼ひ、猶時々なほは油揚をば、崖の熊笹の中へ捨てて置いた。

父親は例の如くに毎朝早く、日に増す寒さをも厭いとわず、裏庭の古井戸に出て、大弓を引いて居られたが、もう二度と狐を見る機会がなかつた。何処から迷まい込んだとも知れぬ瘦せた野良犬の、油揚を食つて居る処を、家うちの飼犬が烈はげしく噛み付いて、其の耳を喰切つた事がある。一家中いっかじゆう、何時とはなく、狐は何処へか逃げてしまった。狐ではなく、あれも矢張やつぱり野良犬であつたのかも知れぬと、自然に安堵の色を見せるようになった。もう冬である。「寒くなつてから火鉢ひばちの掃除する奴があるか。気のきかん者ばかり居る。」と或朝、父の

小言が、一いっ家中かちゆうに響き渡つた。

がたんがたんと、戸、障子、欄間らんまの張紙はりがみが動く。縁先の植込みに、淋しい風の音が、水でも打ちあけるように、突然聞えて突然に断える。学校へ行く時、母上えりまきが襟巻えりまきをなさいとて、箆たんすの曳出しひきだしを引開けた。冷えた広い座敷の空気に、樟しょうのう脳のうの匂においが身に浸渡ひなたるように匂つた。けれども午過ひるすぎには日の光あたたかが暖く、私は乳母や母上と共に縁側の日向ひなたに出て見た時、狐きつね捜さがしの大騒おほさわぎのあつた時分とは、庭の様子ばやしが別世界のように變つて居るのをば、不思議な程に心付こころづいた。梅の樹、碧あおざり梧こずえの梢こずえが枝ばかりになり、芙蓉ふようや萩はぎや雞けい頭いとうや、秋草あきぐさの茂りはすっかり枯れ萎しおれてしまったので、庭中はパツと明あかる日が一ぱいに當つて居て、嘗かつて、小蛇蟲せうだむけらを焼やき殺ころした埋井戸うもれいどのあたりまで、又恐おそしい崖下の真ま黒な杉の木立いただの頂いただきまでが、枯れた梢あいたの間から見通みとおされる。崖の下り口に立つ松の間あいたの、楓かえでは、その紅葉はせが今では汚い枯葉かへになつて、紛々として飛び散る。縁先の敷石の上に置まれた盆栽はぜには一二枚の葉が血のように紅葉したまま残つて居た。父が書齋まるとの丸窓まるまど外そとに、八手やつでの葉は墨より黒く、玉の様な其の花は蒼あおしろ白しろく輝あき、南天なんてんの実のまだ青い手水ちようず鉢ばちのほとりに藪やぶ鶯うぐいすの笹ささ啼なが絶間たえまなく聞えて屋根、軒のき、窓ひさし、庇ひさし、庭一面すずめさえずに雀すずめの囀さえずりはかしましい程である。

私は初冬の庭をば、悲しいとも、淋しいとも思わなかつた。少くとも秋の薄曇りの日も恐しいとは思わなかつた。散り敷く落葉を踏み碎き、踏み響かせて馳せ廻るのが、却て愉快であつた。然し、植木屋の安が、例年の通り、家の定紋を染出した印半纏をきて、職人と二人、松と芭蕉の霜よけをしにとやって来た頃から、間もなく初霜が午過ぎから解け出して、庭へはもう、一足も踏み出されぬようになった。

二

家の飼犬が知らぬ間に何処へか行つてしまつた。犬殺しにやられたのだとも云うし、又、いい犬だつたから、人が盗んで連れて行つたのだとも、議論はまちまちであつた。私は是非とも、新に二度目の飼犬を置くように主張したが、父は犬を置くと、さかりの時分、他処の犬までが来て生垣を破り、庭を荒すからとて、其れなり、家中には犬一匹も置かぬ事となつた。尤も私は、その以前から、台所前の井戸端に、ささやかな養鶏所が出来て毎日学校から帰ると雞に餌をやる事をば、非常に面白く思つて居た処から、其の上にもと、無理な駄々を捏る必要もなかつたのである。如何に幸福な平和な冬籠の時節であ

つたろう。気味悪い狐の事は、下女はじめ一家中の空想から消去つて、夜晚く行く人の足音に、消魂しく吠え出す飼犬の声もなく、木枯の風が庭の大樹をゆする響に、伝通院の鐘の音はかすれて遠く聞える。しめやかなランプの光の下に、私は母と乳母とを相手に、暖い炬燵にあたりながら絵草紙錦絵を繰りひろげて遊ぶ。父は出入りの下役、淀井の老人を相手に奥の広間、引廻す六枚屏風の陰でパチリパチリ碁を打つ。折々は手を叩いて、銚子のつけようが悪いと怒鳴る。母親は下女まかせには出来ないとして、寒い夜を台所へと立つて行かれる。自分は幼心に父の無情を憎く思った。

年の暮が近いて、崖下の貧民窟で、提灯の骨けずりをして居た御維新前のお籠同心が、首をくくつた。遠からぬ安藤坂上の質屋へ五人連の強盗が這入つて、十六になる娘を殺して行つた。伝通院地内の末寺へ盜棒が放火をした。水戸様時分に繁昌した富坂上の何とか云う料理屋が、いよいよ身代限りをした。こんな事をば、出入の按摩の久齋だの、魚屋の吉だの、鳶の清五郎だのが、台所へ来ては交る交る話をして行つたが、然し、私には殆ど何等の感想をも与えない。私は唯だ来春、正月でなければ遊びに来ない、父が役所の小使勘三郎の爺やと、九紋龍の二枚半へうなりを付けて上げたいものだ。お正月に風が吹けばよいと、そんな事ばかり思つて居た。けれども、出入り

の八百屋の御用聞き春公と、家の仲働お玉と云うのが何時か知ら密通して居て、或夜、衣類を脊負い、男女手を取つて、裏門の板塀を越して馳落ちしようとした処を、書生の田崎が見付けて取押えたので、お玉は住吉町の親元へ帰されると云う大騒ぎだけは、何の事か解らずなりに、然し私は大変な事だと感じた。お玉が泣きながら、白髪の母親に手を引かれ、裏門をくぐつて行く後姿は、何となく私の目にも哀れであつた。此れ以来、私には何だか田崎と云う書生が、恐いような、憎いような気がして、あれはお父さんのお気に入りで、僕等だの、お母さんなどには悪い事をする奴であるように感じられてならなかつた。

正月一ぱい、私は紙鳶を上げてばかり遊び暮した。学校のない日曜日には、殊更に朝早く起出で、冬の日の長からぬ事を恨んだが、二月になつて或る日曜日の朝は、そのかいてもなく雪であつた。そして、ついで父親の行かれた事のない勝手口の方に、父の太い皺枯れた声がする。田崎が何か頻りに饒舌り立てて居る。毎朝近所から通つて来る車夫喜助の声もする。私は乳母が衣服を着換えさせようとするのも聞かず、人々の声する方に駆け付けたが、上框に懐手して後向きに立つて居られる母親の姿を見ると、私は何がなしに悲しい、嬉しい気がして、柔い其の袖にしがみつきながら泣いた。

「泣蟲ツ、朝腹あさつばらから何なんだ。」と父は鋭い叱咤しつたの一声。然し、母上は懷の片手を抜いて、静に私の頭かしらを撫で、

「また、狐が出て来ました。宗ちゃんの大好きな雞とりを喰べてしまったんですって。恐いじやありませんか。おとなしくなさい。」

雪は紛々ふんぶんとして勝手口から吹き込む。人達の下駄の齒についた雪の塊なが半なかば解けて、土間の上は早くも泥濘どろになつて居た。御飯焚のお悦、新しく来た仲働、小間使、私の乳母、一同は、殿様が時ならぬ勝手口にお出での事とて戦々せんせん恟々きょうきょうとして、寒さに顫ふるえながら、台所の板の間まに造り付けたように坐つて居た。

父は田崎が揃えて出す足駄あしだをはき、車夫喜助の差翳さしかぎす唐傘からかさを取り、勝手口の外、井戸端の傍そばなる雞小屋とりこやを巡じゆんけん見にと出掛ける。

「母さん。私も行きたい。」

「風邪引くといけません。およしなさい。」

折から、裏門のくぐりを開けて、「どうも、わりいものが降りやした。」と鳶の頭清五郎がさしこの頭巾ずきん、半纏はんてん、手甲てっこうがけの火事装束かじしやうぞくで、町内を廻る第一番の雪見舞いとやつて来た。

「へえツ、飛んでもねえ。狐がお屋敷の雞をとったんでげすつて。御維新此方ア、物騒でげすよ。お稻荷様も御扶持放れで、油揚の臭一つかげねえもんだから、お屋敷へ迷込んだげす。訳ア御わせん。手前達でしめつちまいやしよう。」

鳶の清五郎は雞小屋の傍まで、私を脊負つて行つて呉れた。

今朝方、暁かけて、津々と降り積つた雪の上を忍び寄り、狐は竹垣の下の地を掘つて潜込んだものと見え、雪と砂とを前足で掻乱した狼藉の有様。竹構の中は殊更に、吹込む雪の上を無惨に飛散る雞の羽ばかりが、一点二点、真赤な血の滴りさえ認められた。

「御前、訳ア御わせん。雪の上に足痕がついて居やす。足痕をつけて行きやア、篠田の森ア、直ぐと突止めまさあ。去年中から、へーえ、お庭の崖に居たんでげすか。」

清五郎の云う通り、足痕は庭から崖を下り、松の根元で消えて居る事を発見した。父を初め、一同、「しめた」と覚えず勝利の声を上げる。田崎と車夫喜助が鋤鋤で、雪をかき除けて見ると、去年中あれほど搜索しても分らなかつた狐の穴は、冬も茂る熊笹の蔭にありあり見えすいて居る。いよいよ狐退治の評議が開かれる。

喜助は、唐辛でえぶせば、奴さん、我慢が出来ずにこんこん云いながら出て来る。

出て来た処を取ツちめるがいいと云う。田崎は万一逃げられると残念だから、穴の口元へ罨か其れでなくば火薬を仕掛ける。ところが、鳶の清五郎が、組んで居た腕を解いて、傾げる首と共に、難題を持出した。

「全体、狐ツて奴は、穴一つじやねえ。きつと何処にか抜穴を付けとくつて云うぜ。一方口ばかり堅めたつて、知らねえ中に、裏口からおさらばをきめられちゃ、いい面の皮だ。」

一同、成程と思案に暮れたが、此の裏穴を捜出す事は、大雪の今、差当り、非常に困難なばかりか寧ろ出来ない相談である。一同は遂にがたがた寒さに顫出す程、長評を凝した結果、止むを得ないから、見付出した一方口を硫黄でえぶし、田崎は家にある鉄砲を準備し、父は大弓に矢をつがい、喜助は天秤棒、鳶の清五郎は鳶口、折から、少く後れて、例年の雪掻きにと、植木屋の安が来たので、此れ亦、天秤棒に加わる事となった。

父は洋服に着換る為め、一先屋敷へ這入る。田崎は伝通院前の生薬屋に硫黄と烟硝を買いに行く。残りのものは一升樽を茶碗飲みにして、準備の出来るのを待つて居る騒ぎ。兎や角と暇取つて、いよいよ穴の口元をえぶし出したのは、もう午近くな

を出した処をば、清五郎が待構えて一打ちに打下す鳶口、それが紛れ当りに運好くも、狐の眉間へと、ぐっさり突刺つて、奴さん、ころりと文句も云わず、悲鳴と共にくたばつて仕舞つたとの事。大弓を提げた偉大の父を真先に、田崎と喜助が二人して、倒に獲物を吊した天秤棒をかつぎ、其の後に清五郎と安が引続き、積つた雪を踏みしだき、隊伍正しく崖の上に立現われた時には、私はふいと、絵本で見る忠臣蔵の行列を思出し、ああ勇しいと感じた。然し真近く進んで、書生の田崎が、例の漢語交りで、「坊ちゃん此の通りです。天網恢々疎にして漏らさず。」と差付ける狐を見ると、鳶口で打割られた頭蓋と、喰いしばつた牙の間から、どろどろした生血の雪に滴る有様。私は覚えぬ柔い母親の小袖のかげにその顔を蔽いかくした。

さて、午過ぎからは、家中大酒盛をやる事になったが、生憎とこの大雪で、魚屋は河岸の仕出しが出来なかつたと云う処から、父は家の雞を殺して、出入の者共を饗応する事にした。一同喜び、狐の忍入つた雞小屋から二羽の鶏を捕えて潰した。黒いのと、白い斑ある牝鶏二羽。それは去年の秋の頃、綿のような黄金色なす羽に包まれ、ピヨピヨ鳴いていたのをば、私は毎日学校の行帰り、餌を投げ菜をやりして可愛がつたが、今では立派に肥つた母鶏になつたのを。ああ、二羽が二羽とも、同じ一声の悲鳴と共に、

田崎の手に首をねじられ、喜助の手に毛をむしられ、安の手に腹を割かれ、腸を引出されてしまった。夜更けまで、舌なめずりしながら、酒を飲んで居る人達の真赤な顔が、私には絵草紙で見る鬼の通りに見えた。

眠りながら、その夜よ私は思った。あの人達はどうして、あんなに、狐を憎くんだのであろう。鶏とりを殺したとて、狐を殺した人々は、狐を殺したとて、更に又、鶏にわとりを二羽まで殺したのだ。

ああ、ツルゲネーフは、蛇と蛙の争いから、幼心に神の慈悲心を疑うたぐった。私はすこしく書物を読むようになるが早いのか、世に裁判と云い、懲罰と云うものの意味を疑うようになったのも、或は遠い昔の狐退治。其等それらの記念が知らず知らずの原因になって居たのかも知れない。

青空文庫情報

底本：「荷風全集 第六卷」岩波書店

1992（平成4）年6月8日発行

底本の親本：「歓楽」易風社

1909（明治42）年9月20日

初出：「中学世界 第十二卷第一号」博文館

1909（明治42）年1月1日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

※底本は総ルビですが、読みやすさを考慮して振り仮名の一部を省きました。

※「パチリバチリ」の底本における表記は、「パチリ／＼」です。

入力：渡辺哲史

校正：米田

2012年5月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

狐

永井荷風

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>